

令和7年度 第2回豊中市生活支援サービス部会

令和8年(2026年)1月27日(火)

午後2時30分～午後5時

くらしかん 体験学習室 及び Zoom

《出席状況》豊中市生活支援サービス部会委員総数5名中5名出席)

豊中市生活支援サービス部会
◎小野委員、○大野委員、今井委員、松永委員、當内委員

(◎=部会長 ○=副部会長 委員名簿順)

事務局								
<table><tr><td>福祉部</td><td>坂口次長</td></tr><tr><td>長寿社会政策課</td><td>堂本課長、松宮課長補佐、高木係長、宮脇主査、東山主査</td></tr><tr><td>長寿安心課</td><td>森本課長、島田補佐、時副主幹、室田係長</td></tr><tr><td>地域共生課</td><td>畑山課長補佐</td></tr></table>	福祉部	坂口次長	長寿社会政策課	堂本課長、松宮課長補佐、高木係長、宮脇主査、東山主査	長寿安心課	森本課長、島田補佐、時副主幹、室田係長	地域共生課	畑山課長補佐
福祉部	坂口次長							
長寿社会政策課	堂本課長、松宮課長補佐、高木係長、宮脇主査、東山主査							
長寿安心課	森本課長、島田補佐、時副主幹、室田係長							
地域共生課	畑山課長補佐							
豊中市社会福祉協議会	勝部事務局長、出(いで)課長、白鳥							

傍聴者なし

《議題》

- (1) 令和7年度生活支援コーディネーター活動報告について
- (2) 令和8年度生活支援コーディネーター活動計画について
- (3) 令和9年度(第10期高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画)以降にむけた生活支援体制整備事業の今後について

【事務局】

令和7年度第2回豊中市生活支援サービス部会を開催する。

本日は部会員の皆様全員にご出席いただき、要綱で定める部会委員数の過半数を超えており、本日の会議は成立する。

【議題1「令和7年度生活支援コーディネーター活動報告について」の説明】

【委員】

「豊中めぐり」の移動販売車は誰でも買うことができるのか。

小地域福祉ネットワーク活動の見守り世帯の9500世帯が、第3層の取り組みとしてあるが、見守っている人は社協の人だけなのか、研修を受けた地域の人もそうか。

【社協】

「めぐり」のマルシェは、庄本マルシェ、上新田マルシェ（パークヒルズ）、原田校区など、主に買い物に出にくい地域を中心に実施されている。また、「めぐり」拠点での朝市や、くらし館での地産地消、豊島校区の朝市、岸田クリニックなどでも定例的に開催されている。

基本は地元向けの周知だが、安くて新鮮なことから、ホームページ情報を見て地域外から来られる方も増えている。

あわせて、小地域福祉ネットワークについては、校区福祉委員会を中心に住民主体で見守り活動が行われており、約9500世帯を対象に、民生委員やボランティアが研修を受けながら各小学校区で取り組んでいる。

【委員】

ぐんぐん元気塾だが、令和5年、令和4年と、続けていく中で男性の比率は増えているのか、そして、このスタッフ340名というのは、どういった方々を指すのか。

【社協】

男性は、ここで見てもらうと234名だが、校区によっては増えている。

本活動では運営方法や工夫によって参加者の定着や増加に差があり、一定数が継続参加すると徐々に広がる傾向がある。体操に加え、動画活用や口腔体操、歌などがあり、研修を受けた約340人が運営補助として関わり、男性主導の場では男性参加者が増える傾向も見られる。広報誌や口コミで地域に浸透し、交流の場として評価され、「楽しくて元気になる活動」として親しまれている。

【委員】

社協では事業を縮小せず、多様な取り組みを継続・発展させ、健康マージャンや歌声事業、スマホ相談などが高齢者に好評を得ている。一方、社会のデジタル化が進む中でも、高齢者

にとっては紙媒体での広報や口コミが参加のきっかけとして重要であり、今後も紙による啓発・周知を続けてほしいという要望がある。

【委員】

男性の参加については、やはり難しさがあると感じる。

麻雀や体操、コーラスなど、みんなで一緒に取り組む活動は楽しさがあるが、知らない人の中に入っていくこと自体に、少し気が重くなる方もいるのではないか。

そこで、例えば読書会のように、無理に交流をしなくても同じ場所に集まっていられる活動があれば、まずは気軽に外に出るきっかけになるのではないか。2回、3回と参加するうちに自然と顔見知りになり、少しずつ会話が生まれるような形も考えられるのではないか。

日頃から市民の方と接している立場から実際の感触や課題や意見をお聞きしたい。

【社協】

男性の参加については、定年後の男性が野菜づくりに取り組む「豊中めぐり」が好評で、地域再生大賞にも選ばれるなど、高く評価されている。参加者の方々は、畑仕事をきっかけに英語を生かした多文化ボランティアや歌声の活動をするなど、関心を広げている。

男性は「話さなければならない場」には少し参加しづらい傾向があり、会食よりテイクアウトの方が参加が増えるといった実感もある。その点で、映画会のように無理に会話をしなくてよい場は、とても良いアイデアだと感じている。著作権などの課題はあるが工夫次第で実施できる可能性もあるので、今後の取り組みとして前向きに考えていけたらいいと思う。

【部会長】

マンションサミットに約 150 棟が参加している現状を踏まえ、自治会加入者が減少する中で、この取り組みが従来の自治会の役割を補完・代替するものになり得ているのか、あるいは別の性格のものなのか、その手応えを知りたい。

あわせて、地域づくりの仕組みとしての「第1層・第2層・第3層」の関係について、まず第1層でモデル的に試行し、成果が見えたものを全体や校区単位へ広げていく戦略がこれまで語られてきた中で、現時点ではそれぞれの層をどのように整理し、位置づけているのかを確認したい。

【社協】

マンションサミットには規模の異なる約 150 棟が参加しており、小規模なマンションから大規模なものまで含めると、多くの世帯や人とつながることができている。

防災への取り組みや、高齢化に対応した体操・サロン活動、暮らしの中の困りごとの相談などを、包括支援センターや社協と連携しながら、マンション内で進めてきた。継続的に参加されるマンションも増え、少しずつ課題やニーズの積み重ねもできてきていると感じている。

自治会の加入率が下がる中で、マンションを拠点としたコミュニティづくりは、新しい人のつながりを生む大切な柱になりつつあり、その点に力を入れて取り組んでいる。

また、1層・2層・3層の関係については、最初は校区にこだわらず参加しやすい1層の活動から関わってもらい、活動の楽しさや地域への理解が深まるにつれて、校区単位の3層の活動へと自然につながっていく流れを大切にしている。その広がりや、2層の生活支援コーディネーターが支えながら進めている、ということだ。

【議題2「令和8年度生活支援コーディネーター活動計画について」の説明】

【委員】

社協の立場として、地域で本当に求められている福祉ニーズを、コーディネーターやCSWが丁寧につかみ、それに合った事業を広げていくことが大切だと感じている、という話である。

その具体例として、ペット、とくに犬を通じたコミュニティづくりの可能性が挙げられる。犬の散歩をきっかけに自然なあいさつや会話が生まれ、人とのつながりが広がりやすいという実感があり、猫との違いにも触れながら、身近な交流のきっかけとして面白い視点だと思う。

また、健康マージャンについても、楽しみながら会話が生まれ、地域の情報交換につながる場として評価しており、こうした日常のニーズや関心を大切にしながら事業を広げていく姿勢はとても良いと感じている。

【委員】

犬の散歩をしている人との何気ない声かけが、地域の見守りや安心感につながったことがある。子どもの帰り道がいつもと違うことに気づいて声をかけてくれた方がいて、「ちゃんと見てくれている人がいる」と心強く感じた。

一方で、今は大人が子どもに声をかけることが難しくなり、不審者と受け取られてしまう場合もあるため、犬の散歩中であることが分かるような目印（腕章など）があれば、安心につながるのではないだろうか。

また活動内容については、麻雀だけでなく、これから5年、10年先を見据えて、鉄道やアニメ、懐かしい歌など、世代に合わせて少しずつ内容を更新していけたらうれしい。

【社協】

犬の散歩は男性も関わりやすく、地域とのつながりを生む良いきっかけになるのではないだろうか。犬の名前を使った隊員名やバッジ、共通のバッグなどを工夫することで、「見守りの人」が自然に分かる仕組みをつくり、認知症サポーター研修などを通じて、さりげない声かけや地域の変化への気づきにつなげていけたらと思う。毎日地域を歩くからこそ気づける力を、見守りや支え合いに生かしたい。

あわせて、鉄道やジオラマ、プラモデルなど、好きなことをきっかけに集まる活動や、世代に合わせて広がってきている歌声喫茶など、「楽しい」ことから始まる社会参加の可能性もある。年代ごとの思い出や関心を大切にしながら、仲間づくりや地域への関わりにつながる活動をこれからも増やしていきたい。

【委員】

地域課題として、豊中市内での「移動」に関する問題について、これまで行われてきた支援やサービスの現状と、そこにある課題意識をどのように感じているか知りたい。

あわせて、身寄りのない単身高齢者、特に65歳以上で介護サービスを利用する前段階の方や、認知症などにより判断力が少し低下してきた方への支援について、どのような考えや取り組みがあるのかを教えてほしい。

【社協】

豊中市では、千里丘陵に向かう坂の多い地域を中心に、高齢者の移動や買い物に負担を感じる声が多くある。バス路線がない地域もあり、市ではゴルフカート型モビリティの実験や予約制の乗り合いバスなどの取り組みが行われている。

一方、福祉施設の車を活用した送迎は、利用したいタイミングとの調整が難しいという課題がある。また、駅周辺ではタクシーが少なく、待ち時間が長くなる状況も見られる。配車アプリ活用については、スマホ相談を通じて支援した結果、利用しやすくなった例もある。

移送の課題は生活支援コーディネーターのみでの対応が難しいため、今後は他分野と連携しながら検討を進めていく。

【委員】

タクシー不足の問題について、庄内地域でも高齢者が長時間タクシーを待っている姿をよく見かける。現在は電話ではタクシーがつながりにくく、配車アプリが主流になっていることを高齢者が十分理解できていない現状もあり、スマホ講座の中でこうしたタイムリーな話題を取り上げてほしい。

また、計画全体を見て事業量が非常に多く、今後さらに地域課題が増えていく中で、担い手の負担が増え過ぎないか心配だ。事業を増やすだけでなく、整理・統合なども含め、無理のない持続可能な形で活動を進めてほしい。

【社協】

第3層の取り組みは住民主体で進められており、行政や社協が継続的に関与する形ではなく、活動が自走できている点が特徴だ。例えば「あぐり」のような活動も、立ち上げ時には支援が必要だが、その後は住民自身が運営・展開している。

支援側は、きっかけづくりや定期的な振り返り・評価などを中心に関わり、常に伴走する形は取らないことで、持続可能な仕組みを意識して進めている。人手に依存しすぎない設計とすることで、活動が長く続くよう工夫している。

一方で、時代に合わなくなった活動や停滞している取り組みについては、見直しやリニューアル、取捨選択も行いながら、新たな課題やニーズに対応していきたいと考えている。

【部会長】

まさに現代的な課題とずっと続いている課題、様々ある。

非常に多くの事業が展開されていることに感心しており、社協が中心となって「直接支援」ではなく、住民主体の力を引き出す間接援助を丁寧実践してきた成果だと感じる。すべてを社協や市が抱え込むのではなく、地域の力を生かしてきたことこそが、地域福祉の強みだと思う。

一方で、社会保障全体が厳しくなっていく中、移動支援などの課題が地域の困りごととして顕在化している。今後は、こうした取り組みを地域福祉や市全体の視点でどう評価し、どのように後押ししていくのかを整理していく必要があるのではないか。

全体として、現在の活動が地域ニーズにしっかり応えていることを確認し合いながら、こうした取り組みを周囲にも伝え、理解と支援を広げていくことが大切だと考える。

【議題3「令和9年度（第10期高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画）以降にむけた生活支援体制整備事業の今後について」の説明】

【委員】

計画の目的やネットワーク構築について、特に第3層で活動している地域の担い手の声をしっかり聞くことが重要であり、生活支援コーディネーターと連携しながら、現場のニーズに基づいたより効果的な事業を進めてほしい。

また、情報発信については「情報を知らないことが機会の損失になる」との観点から、介護・福祉情報の周知をより充実させる必要がある。特に高齢者にとってSNSはハードルが高いため、今後も紙媒体による事業紹介や広報を継続し、多くの人に情報が届くよう工夫してほしいと思う。

【部会長】

実際今取り組んでいる人の声をしっかり聴いてそれを反映させていくということと、紙媒体の重要さというご指摘に感謝する。

【委員】

就労的活動支援について、内容としてはとても良い取り組みだと評価したうえで、その具体像や受け入れ側のスタンスについて教えてほしい。就労A型・B型のような「支援付き就

労」に近いイメージはあるものの、安価な労働力として扱われる形では、本人の意欲や継続性が損なわれてしまうのではないだろうか。

【事務局】

視察先では内職や便利屋的な活動が行われていたが、豊中市において現時点で考えているのは、仕事を引退した方が持つ経験や能力を生かし、フルタイムではなく、「やること自体に意味を感じられる」少し高度な役割を担えるような、ちょうど中間的な仕事を想定している。

【委員】

日常の中には「頼みたいけれど頼みにくい」小さな仕事、例えば園芸や軽作業などが多くあり、そうしたニーズと人をつなぐ仕組みがあれば、正式な形で依頼し、わずかでも対価を支払いながら、良い関係で関われるのではないだろうか。

【社協】

全国的には、シニア向けの「隙間バイト」的なマッチングや、高齢者による協同組合をつくり、共同で事業を行うなど、さまざまな就労的活動支援の取り組みが進んでいる。短時間だけ働く形や、昼食づくりなど限られた時間で無理なく関われる仕組みなど、働き方の多様化も見られる。

豊中でも、以前から内職広場のような取り組みを行い、雑談だけでなく、少額でも収入につながることで喜びを感じる人が参加できる場づくりをしてきた。ただ、こうした活動を支えるには、地域全体で仕事を生み出す仕組みづくりが必要であり、人手不足の課題とも関係してくる。

就労にはさまざまなハードルがあるが、新しい展開の可能性も感じられる分野であり、次年度以降を見据えて引き続き検討していく必要があると考えている。

【部会長】

就労的活動支援の対象は範囲が狭く、有償ボランティアやシルバー人材とは異なる、新しい位置づけが求められている。働きたいというニーズはあるものの、継続的に関われる「場」や仕組みをどうつくるかが難しく、新しい働き方を提示できるかが鍵になると感じている。

名称の硬さなどの課題はあるものの、従来の枠に当てはまらない形での就労や役割づくりが見えてくれば、可能性が広がるのではないだろうか。

【委員】

就労的活動支援について、シニア層がすでに活用している「隙間バイト」との違いや位置づけをどう整理するのかという点が気になる。内職広場のように少額でも収入につながる形は、有償ボランティアと仕事の間のようにも見え、この「隙間」に当たる支援が具体的にどのようなものなのか、もう少しイメージを示してほしい。

また、仕事を依頼したい側をどう見つけ、つないでいくかについては、コーディネーターの役割や工夫が重要になるのではないだろうか。

あわせて情報発信については、高齢者には紙媒体が引き続き重要である一方、今後の定年後世代にはデジタルに慣れた人も多いことから、紙とデジタルの両方を使い分けながら、参加や関心につながる情報提供を行っていくことが大切ではないかと考える。

【委員】

高齢者が担える活動に関する情報発信については、紙媒体は入口として分かりやすい一方で、活動の継続状況や最新情報を伝えるには、デジタルの活用も有効ではないだろうか。

介護情報冊子やホームページに QR コードを掲載し、紙からオンラインへスムーズにつながる仕組みがあれば、より利用しやすくなるのではないだろうか。

また、コーディネーター配置事業について「男女問わず」としている点を踏まえつつ、これまで地域との関わりが少なかった定年後の女性に対しても、今後は積極的に参加のきっかけを届けていくことが大切ではないかなと思う。男性だけでなく、女性の社会参加にも幅広く目を向けてほしい。

【部会長】

今後の課題として、紙媒体とデジタルの情報発信のバランスや、男性だけでなく女性の地域参加、とくに定年後の女性の「地域回帰」にも目を向けていく必要性がある。こうした点については課題として受けとめ、今後さらに検討して行ってほしい。

あわせて、現状分析は丁寧に行われている一方、今後の方針として「新たな地域資源の創出より、既存資源をつなぐ段階」とされている点について、豊中の特徴を踏まえると、事業を生み出しながら担い手も育ててきた実践があり、単なる抑制ではなく「創出しつつ横につなげていく」姿がより現状や将来像に合っているのではないだろうか。

公的責任を前提としながらも、社会参加や孤立といった課題に伝えていくためには、地域生活支援のあり方が重要になってきており、こうした視点を次期計画に反映できれば、よりダイナミックな内容になるのではないだろうか。今後も引き続き議論を深めていきたい。

【事務局】

就労的活動支援については、タイミーのような短時間就労との違いを意識しつつ、あくまで個人的な考えとしてだが、「責任を重くしすぎない関わり方」を用意できないかと考えている。正式な雇用や時給を前提とする働き方ではなく、得意なこととちょっとした困りごとが自然につながるような、気負わず参加できる形を目指したいと考えている。

また、介護情報冊子については年1回発行のため最新情報の掲載が難しいことから、QRコードを活用してホームページにつなぎ、更新情報はデジタルで確認できる仕組みを想定し、冊子には「困ったときの支援」だけでなく、「自分が活躍できるきっかけ」となる内容を盛り込み、関心を持ってもらう入口にしたい。

さらに、地域資源については、新たな活動を否定するものではなく、まずは既存の社会資源同士をつなげていくことを重視しつつ、住民のニーズや担い手が自然に生まれる活動については、今後も柔軟に支援していきたい。これまでのように「毎年新しい資源をつくる」ことを目的化するのではなく、実情に合った形に見直していきたい。

【委員】

地域課題になるのかわからないが、庄内圏域においてお風呂問題はあるのだろうかと感じる。

最近銭湯が少なくなり、今までの繋がりも希薄になっている。空港線沿い五色の湯は裸になってから階段を上らないといけないという、変わった入り方で、高齢の方が杖も装具も外した状態で階段を上ってお風呂に入るのは難しいだろうと思われる。簡単に解決できる課題ではないが、衛生面が担保できていない方も見受けられるので、そういった課題が解決できたらいいと思う。

【部会長】

生活支援体制整備事業について、多数のご意見をいただき感謝する。

これで令和7年度第2回生活支援サービス部会を終了する。